

発行所
 札幌市北区北15条西7丁目
 北大医学部同窓会
 TEL&FAX (011) 706-5007
 E-mail: furate@med.hokudai.ac.jp
 http://www.med.hokudai.ac.jp/~alum-w/
編集人 田中 伸哉
発行人 浅香 正博

北大医学部同窓会新聞



CONTENTS	
(1) ・年頭のご挨拶	浅香 正博 笠原 正典
(2) ・名誉教授 松宮英視先生(24期)を偲んで	小林 邦彦 ・秋の褒章、叙勲 齋藤 和雄 櫻田 恵石 小西 藤平
(3) ・先生ご無沙汰しています…皆川 知紀 ・新入生合宿研修の変更について	大滝 純司
(4) ・ズームアップ⑫ 勝沼栄明衆議院議員(76期)インタビュー	田中 伸哉
(5) ・北海道大学ほっかいどう同窓会の 設立のご案内 ・原稿の募集	
(6) ・同窓会への寄付受け入れ報告 ・同窓会への寄付のお願い ・総会、新入会員歓迎会のお知らせ ・理事会・評議員会報告	
(7) ・同窓会費納入のお願い ・同窓会費未納者に対する 重要なお知らせ ・平成26年度から同窓会費の 納付方法が変わります ・告知板 ・フラテ100号発行のお知らせ	
(8) ・新刊書紹介 ・ご逝去者 ・一面の写真説明 ・編集後記	

「初冬の北大キャンパスを望む」

木佐 健悟(80期)



年頭のご挨拶

北海道大学
医学部同窓会会長

浅香 正博(48期)

新年おめでとうございます。同窓会の皆様方にはどのように新年を迎えられたでしょうか。昨年9月に、2020年のオリンピック開催都市に東京が決定し日本中が沸きたちました。久方ぶりに明るい未来が見えてきたように見えます。前回の東京オリンピックは終戦後20年での日本の完全復活を世界に印象づけ、当時高校生であった私も大きな元気をもらうことができました。2回目のオリンピック開催は、成熟した国家としての日本を世界にアピールするとともに若い世代にスポーツを通じた世界親善の素晴らしさを理解してもらえるような企画がなされるよう希望しています。

私は、伝統ある北大医学部同窓会を開かれたものにして会員の皆様方との連携を密にしていきたいと常々思っております。ここ数年、同窓会費の納入率が思わしくないため、昨年特別会計から900万円余を一般会計に組み込まざるを得ませんでした。納入率の良くない若い世代の方々に同窓会の意義をわかっていただくために、同窓会のホームページも立ち上げ、同窓生の情報を早く会員の皆様にお伝えできるようにいたしました。また、会費を納入しやすいようにコンビニ店頭でも納付

できるよう努力をしております。

次に、同窓会への寄付についてであります。同窓会員から北大のフロンティア基金への寄付が多くなされておりますが、今年から医学部同窓会への寄付を積極的に募りたいと考えております。寄付をされる同窓会員への細かな対応ができるようにしたいと思いますので、個人や各期による寄付をお考えの際には是非医学部同窓会のごともお考えに入れていただくことを希望いたします。

オリンピックが開催される2020年の1年前、つまり2019年に北大医学部は創立100年を迎えます。あと5年後です。この年は北大医学部同窓生にとってオリンピック以上の重要な年になることが予想されます。100周年記念行事として何を行うのかについては、医学部と同窓会で十分な打ち合わせが必要であり、この4月には合同の準備委員会を立ち上げたいと考えております。時間が十分ありますので、同窓会の皆様方よりさまざまなアイデアをお寄せいただければ幸いです。

最後になりますが、北海道大学医学部同窓会会員の皆様方のご健勝を心からお祈りし、年頭のご挨拶といたします。



年頭のご挨拶

医学研究科長・医学部長

笠原 正典(56期)

明けましておめでとうございます。会員の皆様には、健やかに新年をお迎えになられたこととお慶び申し上げます。

昨年は国による国立大学改革の一環としてグローバル化推進が打ち出され、世界と競う大学を選別し、そこに予算を戦略的・重点的に配分する方針が明確にされました。また、国立大学医学部の設置目的を問う「ミッションの再定義」が行われ、各大学医学部の使命を明確化する動きが加速しました。このような中、医学研究科・医学部は「次世代を担う医学研究者・教育者」と「研究する心をもった指導的臨床医」の養成という使命を掲げ、日夜、教育・研究に励んでおります。幸い、医学研究科では多くの大型研究プロジェクト、人材養成プロジェクトが進行しておりますが、平成25年度より新たに研究戦略室を設置し、外部資金獲得や人材の戦略的任用を支援する体制を整備しました。

学部教育では、昨年4月入学者からカリキュラムを改正し、学生を研究室に配属し研究の面白さを体験してもらう医学研究演習と診療参加型臨床実習を大幅に強化しました。診療参加型臨床実習では学生が診療チームの一員として診療業務を分担するため、今まで以上にきめ細かな

指導が要求されます。これに対応するため、本年4月よりコア科目の臨床実習を支援する教育助教を増員する予定です。一方、大学院教育では、臨床研修2年目から研修と並行して大学院課程を履修できる「クラークプログラム」、10月入学制度などを導入しました。今後、教育の国際標準化を目標に、学部・大学院教育の更なる充実を図っていく所存です。

さて、北大医学部はいよいよ5年後に創立100周年を迎えます。新しい100年に向かって確かな一歩を力強く踏み出すことができるよう、記念事業を計画しております。4月には実行委員会を立ち上げたいと思っておりますので、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。内容につきましては固まり次第、ご案内申し上げます。

若手医師の大学離れ、大学院入学者数の減少など、医学研究科・医学部には課題が山積しております。こうした課題の解決に向けて努力してまいりますので、会員の皆様におかれましては、本年も引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。

新年が皆様にとりまして希望に満ちた良き年となりますことをお祈り申し上げまして、年頭のご挨拶といたします。



名誉教授 松宮英視先生(24期)を偲んで

北海道大学名誉教授

小林 邦彦(42期)

北海道大学名誉教授松宮英視先生は、平成25年11月10日にご逝去なされました。享年88歳でした。

先生は、昭和23年北海道大学医学部を卒業され、昭和24年に故中村豊教授が担当されていた細菌学教室(現微生物学講座免疫学分野)に助手として奉職し、その後同教室を担当した故山田守英教授、故飯田廣夫教授の下で講師、助教授として研究・学生教育にご活躍なされました。昭和47年北海道大学附属病院検査部の

初代専任部長に就任されると共に教授に昇任され、その後昭和60年医学部に新設された臨床検査医学講座の初代教授に就任されました。その間先生は、先生の専門分野であるウイルス学における研究で、北海道医学会賞、同知事賞を受賞されています。先生は、検査医学講座の教授として、また検査部の部長としての勤務にもかかわらず昭和62年5月から昭和62年7月まで医学部附属病院長(事務取扱)を引き受けられ、その

後引き続き平成元年3月の定年退官まで附属病院長として病院の新築を含む病院再開発計画の中心として活躍されました。退官とともに先生は北海道大学名誉教授となられました。引き続き天使大学の教授(看護学科)をされ、平成15年まで勤められました。この間、それまで女子大であった大学の共学化や看護栄養学部の新設など、同大学の発展にも尽力されました。平成15年には、これらの功績で、瑞宝中綬賞を受けられています。

先生は、これまで述べてきたように北大医学部では新講座設立、附属病院では病院新築や再開発に貢献されたのみではなく、退官後に赴任された天使大学でもその発展に大いに

寄与してきたので、先生をご存じない方は嘸かし強面する方とお思いになるかも知れませんが、写真に見るように大変柔和な先生で、怒った顔をされたのを見たことはありません。私が先生に初めてお会いしたのは、先生の後任として臨床検査医学講座教授になった平成元年ですが、その時検査部や検査医学講座の今後の運営を尋ねると「先生の思う所を存分にやってくれば、それで良いですよ」ととても優しいお言葉を頂き、感激と安心したのを思い出します。お陰でほんの5年間でしたが検査部部長と検査医学講座教授時代はとても楽しく過ごせました。先生、有り難うございました。心よりご冥福をお祈り致します。



秋の褒章、叙勲



瑞宝中綬章

齋藤 和雄
(35期)

「叙勲の栄をうけて」

平成25年秋の叙勲の栄に浴し身に余る光栄に存じます。11月11日(月)瑞宝中綬章の伝達を受け、皇居で天皇陛下に拝謁し、お言葉を賜り、記念撮影をして参りました。

この度の綬章は、これまで北大に於いて、ご指導戴いた恩師はじめ、研究、教育、所属講座及び学部の運営発展のために共に歩んで力を注いで下さった先学、同輩のご指導とご協力のお陰と心より感謝致しております。

昭和52年4月、北大に新設された大学院環境科学研究科の教授として社会環境学専攻の基幹講座である環境医学講座を担当した5年間、同57年4月医学部衛生学講座の教授に配置換えになってから、環境科学研究科が平成5年4月に廃止されるまで協力講座を担当した11年間及び北大を定年退官した平成10年3月までの5年間の計20年間に巣立った後輩のうち20名余が教授として、北海道から九州にいたる全国各地の大学で環境科学並びに医学の分野で教育、研究の中心となって活躍していることは私にとってこの上ない喜びです。

私の専門は予防医学で健康の維持増進、疾病の早期発見・早期治療に係わる研究です。これまで、職場及

び都市の騒音問題、空気中微量鉛等の有害物質に関する研究、疲労及びストレスと疾病発現との関係、精神疲労と肉体疲労の関係、体内における微量元素特に銅・亜鉛・マンガン・セレン等の分布と胃癌や糖尿病などの生活習慣病との関係、鉛職場や都市公害としての大気中微量鉛の長期暴露による人体影響の研究です。これらの研究の中でいくつかの新知見を明らかに出来たこと、台風による風倒木処理に使用したチェンソー及び刈払い機による北海道の林業労働者の10年以上にわたる振動障害の巡回健診並びに振動障害検診項目の妥当性に関する研究に取り組んだこと、医学部長時代に小児科で行われた我が国最初の遺伝子治療の推

進に関わることができたこと、第17期日本学術会議会員として地域医療並びに予防医学の問題に取り組み、更に、アジア学術会議の発足に係わったことは些かなりとも学術の発展に貢献できたと考えております。

定年退職後は、疾病の第2次予防の仕事としてクリニックを開設して職場及び地域住民の一般診療、健康診断、人間ドック等を通じて疾病の早期発見、早期治療に取り組んで今日に至っております。

今後はこの度の栄誉を心にきざみ一層の精進を致す所存でございますので何卒変わらぬご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。



瑞宝中綬章

櫻田 恵右
(40期)

「叙勲の栄に浴して」

此の度は、はからずも瑞宝中綬章を拝受し、誠に光栄のいたりであります。

これもひとえに永きに亘り種々ご援助をいただいた恩師、先輩諸兄姉、同僚ならびに後輩各位の賜物と心より感謝申し上げます。有難う御座いました。

かえりみますと、医療の本質をも問われた60年安保の時代に医師になり故白石忠雄先生のご推薦で東京大学で血液学の臨床ならびに研究をスタートさせていただきました。

以降、血液疾患の診療、研究および教育に携わってきました。当時の血液疾患の予後は極めて厳しく、日夜付き添うのが治療の主体でした。このため、疾患の早期診断や道内の実情を把握すべく、各地で道庁主催の難病検診の実施や成分輸血の普及などの輸血事業に参画してきました。札幌通信病院に赴任後も、一部の部門は関与させていただきました。

現在いささか体調に難がありますが、今後とも綬章に恥じないように研鑽していく決意であり、なお一層のご好誼をお願い申し上げます。



旭日双光章

小西 藤平
(39期)

「叙勲の栄に浴して」

この度ははからずも平成25年秋の叙勲に際して、旭日双光章綬章の栄に浴することになりました。

平成25年11月7日、札幌グランドホテルにおいて高橋知事より勲記及び勲章の伝達があり、11月8日午後から厚生労働省において厚生労働副大臣

によるお祝辞があり、その後バスにて皇居に参内し、豊明殿にて天皇陛下に拝謁し、お祝いのお言葉をいただきました。私達は夫妻で出席しました。一生の思い出になりました。

思い起こせば、昭和48年1月縁があって千歳市に小児科医院を開院し40年が過ぎました。この間千歳医師会の理事(学校医担当)として21年間、副会長として11年間務め、医師会の発展に微力ながら貢献してきました。また学校医として40年間継続し、現在中学校1校、小学校2校の校医をしています。

開院40年間の思い出は色々ありますが、開院当初は麻疹ワクチンが高価でまだあまり普及していず、そのため毎年必ず麻疹の流行があり、院内感染を防ぐため麻疹患者はすべて往診しており、外来が混んで診療時間内に往診に行けない時は、診療終了後夜間妻と2人で往診したことが何度もありました。

また当医師会は昭和51年4月より全国に先駆けて在宅当番による救急急病当番医制を実施していたので、当院も月1度参加し、夜間妻と2人で急病患者に対応することが何年も続き

ました。

体のあまり丈夫でない私が、これまで何とか診療を続けてこれたのは妻の内助の功のお蔭と感謝しております。

昔野球少年であった私の部屋の壁に、当時巨人軍の不動の4番打者で、後に名監督となった故川上哲治氏のサイン入りのプロマイドが貼ってあり、その中に書かれていた言葉が好きでした。「努力第一」。

先生ご無沙汰しています



名誉教授 皆川 知紀(41期)

医学部同窓会の皆様には大変ご無沙汰をし、恐縮しているところでしたが、今回、編集委員の樋田先生から寄稿の御依頼をいただき、退官1年前に最終講義もせず10年間の御無沙汰と基礎医学から臨床医への最後の挑戦を終えた今、5度目になります同窓会新聞への寄稿を果たそうと思ひます。

大学は独立法人化する時であり、講座の解体と再編を要求され、当時の私の行動は、医学部の伝統を否定したのではなく、混沌の中でむしろ与えられた職責を十分に果たしたとの一念のみでありました。忘れられない一つに、20年ほど前になりますが、73期の学生諸君と一緒に夏季東医体を成功裏に終えたことを挙げる事ができます。開会式に学部旗が必要となり、医学部全員からデザインを募り、教授会の投票を経て、同窓会会員の御寄付100万円で作ったものです。同窓会新聞のロゴに採用されているのを見るたびに新鮮に過去が蘇ります。本稿では、これまでの人生を振り返り書き残しておきたいエピソードを記し、ご容赦いただきたいと思ひます。

1. 臨床医への動機付け

41期生は、安保闘争とそれに続く学園紛争の渦中にあり、落ち着かない学生時代を過ごしました。さらに、インターン制度廃止運動に賛同した同期全員が北大病院に立てこもりインターンを行いました。私は、同期の杉山先生と1週間交代の当直を愛育病院で1年間行いました。病床に正座して歯を磨き薄化粧をした若い患者さんが、当直明けの私に突然「私と高等学校のクラスが同じでした」と挨拶しました。その夜の当直、彼女の容態が急変し、翌朝急性腎不全で亡くなりました。私にとって、生涯忘れることのない体験になりました。流れ落ちる涙は止むことがありませんでした。

2. 基礎大学院への進学と研究

インターンを終了後、当然臨床医への道を選択するはずでしたが、育英会奨学金の返済と大学院での生活のためにも奨学金を必要としました。多額になる返済を免除されるには当分の間の研究職を選択せざるを得ませんでした。幸いなことに、インターン時代の自主研修で、山田先生(細菌学)の情熱焔のお話しに魅せられ、基礎医学の危機と誘われ、コッホ、パスツールの世界に自らを試したくなっていました。院生の最初の仕事は、松宮先生に連れられて近くの屠殺場に行き、牛の血液を大量にバケツに貰い、教室まで運び、翌日血清を連続遠心分離とザイツ濾過し、熱非働化することでした。私に与えられた研究テーマは、「麻疹ウイルス持続感染系の樹立と維持」でした。麻疹ウイルス力価測定、感染細胞の検出に必要なアフリカミドリザルの赤血球は国立予防衛生研究所から常に提供され、麻疹患者血清は、同期の富樫先生、八森先生に、自己免疫患者血清は井出先生に分与いただきました。生体レベルでも可能な点を強調しました。SSPEのモデル研究でした。麻疹ウイルス持続感染研究には、小児科の桑島先生、ムンプスウイルス持続感染研究では加藤院生が頑張りました。持続感染細胞がインターフェロンを大量に産生していることを発見し、国際特許取得近くまで進めた藤井院生は、その後札幌大微生物学講座の教授に就任しました。

3. 長野泰一先生との出会い

大学院を修了した春、北里研究所から講演依頼があり、私の麻疹ウイルス持続感染について講演をさせていただきました。最前列で聴いていただきましたのが、牧野ウイルス部長と長野先生でした。長野先生は、インターフェロン発見者のお一人として著名な北大

医学部出身の大先輩でした。東大伝染病研究所所長を御歴任後、学士院賞恩賜賞を受賞され、北里研究所で研究を進めておられました。その時以来、御指導御鞭撻をいただき、先生の主催される「ウイルス抑制因子研究会」に参加させていただきました。先生は、90歳まで研究に情熱を燃やされ、解説付き論文集を出されました。そして92歳で肺炎のために亡くなられました(1998年)。今私は72歳、天国からのお叱りが聞こえてきます。長野先生との出会いは、また私の研究の方向転換の時でもありました。米国ピッツバーグ大学での免疫インターフェロンの研究を、帰国後発展させ、KOマウス宿を用いてリステリア菌、ロドコッカス菌、髄膜炎ウイルス感染とインターフェロン、サイトカインの役割について解明し、一方でヒト患者血清など病材中の検出を行い「内在性サイトカインシステムの存在と意義」についてまとめることが出来ました。マウスを用いた研究は、中根助教授が中心となり、多くの業績を挙げ、1994年弘前大学医学部細菌学講座の教授に就任し、現在は副学長をされています。

長野先生の功績をたたえて、北大115周年記念特別講演をお願いし、1993年「Nagano Symposium」、亡くなられた後の2000年「Nagano Memorial Symposium」を札幌で開催しました。多くの外国人研究者が積極的に参加していただいたのが印象的でした。先生の御遺志のことで、ご遺族から多額の奨学寄附金をいただき、教室にP3感染研究室を作らせていただきました。先生は、御自身で故郷の尾鷲市の川原で見つけられた丸い自然石を墓石として、静かに質素に眠られています。

4. エキノコックス症の疫学研究

研究より雑用が増し、自治体からの要請もありました。中でも私の興味

は、道のエキノコックス対策協議会会長の仕事にありました。鈴木先生の御指導もあり、礼文島、根釧地区の視察調査に何度も出かけました。更にはロシアのサハリン州へも足を伸ばしました。2001年9月11日はサハリンにいました。礼文町住民の協力和新資料の発掘により「礼文島エキノコックス症の自然史再考」としてまとめることが出来ました。ここまで来ますと、臨床で直接患者さんに接することになりました。インターン時代の思いは捨てられませんでした。

5. 臨床医への転身

退官1年前の2003年4月より、状況の悪化した雨竜町の病院の院長への要請がありました。何科でもない感染症科としてなら顕微鏡1つで何とかなる。そんな自信は、全く無意味であることを直ぐ知ることになりました。その当時から問題でありました地域医療、高齢者医療における患者さんへの行政のしわ寄せは、無視できない状況にあり、今後の改善は絶望的であります。昔は、北大病院で最期を迎えることは、患者さんにとって何よりの安心であったのが、今は違う。私が勤務しました長期療養型の病院こそが最期を迎える患者さんの安心の場になっています。10年ほど頑張りましたが、限りがありました。忙がしくなるほどに、私の体力は消耗し安心安全の医療と病院管理に不安を覚えるようになりました。同窓の先輩、林先生、淵田先生にも御心配いただきました。

私自身は十分に満足できた臨床経験でしたが、家族の心配もあり、本年6月で退職を決断しました。同期の諸兄をはじめ同窓の皆様、教室員、病院職員、礼文町、雨竜町の皆さんに心からの謝意を表して最後の寄稿とさせていただきます。

新入生合宿研修の変更について



大滝 純司
(会員2)

毎年4月に新1年生の合宿研修が行われていましたが、この研修を今年度の入学生からは2年次の春に行うことになりました。この変更について、その理由や今後の課題などを中心にご紹介いたします。

【従来の合宿研修】

従来の合宿研修は、大滝セミナーハウスを会場に、新1年生を対象として行われていました。ご存知の方も多いと

思いますが、この会場は北海道大学の施設で伊達市大滝区にあり、正式名称は「北海道地区国立大学大滝セミナーハウス」です。「北海道内の国立大学及び国立高等専門学校」の学生と教職員が共同生活をしながら交流を図り、親睦を深めるとともに、学生の正課、課外活動を助長し、教育効果をより高める(同セミナーハウスのwebsiteより)ことを目的とした、低廉な利用料金で豊かな自然の中で研修できる貴重な施設です。

これまでの合宿研修は、新1年生が一堂に会して互いに交流すると共に、医学科の教職員や上級生とも顔見知りになり、そして医学科での専門教育の学

習や医学生としての生活や進路について考える、貴重な機会になっていました。新1年生には未成年者が多いことから、昨年度は飲酒を一切禁止して実施しましたが、参加者は深夜まで話し込み交流を深めていました。

【変更する目的】

この合宿研修の実施時期と学年を変更する最大の目的は、2年次から医学科で学ぶ学士入学や総合理系からの入学者(10名)も含めて研修を行うことにあります。これまでの合宿研修は1年次に行われていたため、これらの学生が参加できていませんでした。前述したように、来年度からは2年次に新たな研修を実施する予定ですが、これら10名

も含めた2年生全員が参加して研修することにより、学生同士の交流がこれまで以上に促進されることを期待しています。また、専門科目の授業が本格的に始まる時期に研修を行うことにより、専門教育に関するより効果的なオリエンテーションが行えると考えています。

【会場等の見直し】

実施時期を変更するのを機に、合宿研修の会場や企画の内容も再検討する予定です。

これまで会場として利用してきた大滝セミナーハウスは、残念ながらこの研修の会場としては手狭で、一部の教職員が管理人室に宿泊したり、食事を

二交代制にするなどの工夫をして、何とか対応してきました。今回の見直しにより2年次からの入学者が加わると参加者が更に増えますが、それに対応できない状況です。収容人数のより多い会場に変更することによりこの問題を解決するよう、検討を進めます。

企画の内容については、これまでは研修対象者が1年生だったため、上級生

が部活動へ勧誘する絶好の機会となっており、その目的で上級生が下級生に働きかける形の交流がかなり多くなっていました。2年次での研修に変更することにより、2年次学生同士や教員との交流に重点が移ることが予想されます。その点も踏まえて、新たな企画を検討してまいります。

[変更に伴う課題]

現在のカリキュラムでは医学科に進む1年生が一堂に会する機会は少なく、今回の見直しに伴い、この学生たちが1年次に医学の専門教育を意識し、医学の教員に接する機会が減るのではないかと懸念されます。この点については、今年度は医学科の教員によるクラスチューター制度や、1年生を対象としたオリエンテーション（学内で半日

間）で対応しています。また、今年度の入学者から始まった新カリキュラムでは、それ以前のカリキュラムよりも専門教育の一部が更に早期から開始されます。これらにより、合宿研修の時期を変更することによる教育効果の変化を補完したいと考えています。

ズームアップ⑫ 勝沼栄明衆議院議員(76期)インタビュー

編集委員長 田中 伸哉(66期)

田中：まずは第47回衆議院議員総選挙、当選おめでとうございます。これまで医学部関係者で国政に関わった先生としては、第1内科の初代教授の有馬英二先生（東大医学部卒）が教授退官後昭和21年から衆議院議員を昭和25年から参議院議員を務められています。また、箕輪登先生（医専4期）は、衆議院議員を8期務められ1981年には郵政大臣になりました。また、高桑栄松先生（17期）は1983年から参議院議員を2期務められました。それ以来と思いますので、医学部の卒業生としては久しぶりの快挙です。本日はわざわざ大学にお越しいただきありがとうございます。

勝沼：こちらこそインタビューの機会をいただきありがとうございます。

田中：早速ですが先生は横浜出身ということですが、なぜ医師を目指したのですか、また学生時代の事などお聞かせください。

勝沼：実は子供の時は体が弱かったので、お医者さんに診てもらう事が多く、それで医師にあこがれていました。ですから小児科医になりたいと思っていました。学生時代は、硬式テニス部に4年間所属しており、そのあとは2年間イベントサークルをやっていました。女性を中心に人が集まりすぎましたね（笑）。学生時代の思い出ですが、医学部2年生の時に、金髪の坊主にしました。すると組織学の阿部先生に、「医学部ではじめての髪の色で驚いた、だが何でもはじめてはいいことだ」と今思うと大変ありがたい教育的なコメントをもらいました。学業の方はいつもぎりぎりでした。卒業が近くなって小児科をまわっていたときに担当していたウィルムス腫瘍の患者さんが亡くなったのが衝撃でした。それで小児科の道はやめて、卒業後は杉原先生が主宰される形成外科に入局しました。北大の形成外科は美容から大きな手術までオールマイティーにできる医師の教育がなされていたのでそれが魅力的でした。専門医の資格は7年目に取得し2年間形成外科専門医として勤務しました。その後医療以外のことに興味を湧いてきて、思い切って医局員を辞しました。

田中：ではその後政治家を目指したきっかけを教えてください。

勝沼：一般的に医師は政治にうといと思いますが自分も以前はそうでした。医局を辞めたあとは医者としてアルバイトはしながらも時間の余裕ができたため、このとき本格的に政治に興味を持ちました。特に2009年の8月に民主党政権が誕生したのですが、民主党政権の主張に国の将来を任せるのは危ういという、大きな危機感を感じて翌日自民党に入党しました。特に国の安全保障など重要なテーマと考えていたのですが、口だけに終わりたくなかったので予備自衛官になりました。その後北海道の自民党主宰の政治塾に2期生として入りました。それがきっかけで2011年の道議会選挙にできるように言われ出馬したのですが、144票の接戦で負けました。5名中3名が当選した選挙でしたが、それが悔しくて事務所をたたまずに政治活動を続けていました。この度、衆院選挙の風向きも自民党にかなり順風だということで、名簿にもいまままで以上に志のある者を載せようということになり、推薦いただき今回の当選となりました。

田中：道議会議員選挙に落選したのが今日につながったのですね。

勝沼：そうですね、政治家になれるかどうか6割は運と言われていますが、準備している者に運が来るという事です。私自身は親戚に医者・看護師・政治家はおりません。地盤看板カバンは全くありません。飛び込んでみようという気持ちで挑戦したわけです。

田中：では先生の現在の政治活動のテーマを教えてください。

勝沼：医師ですので、社会保障費が国家予算の3分の1を占める状況の中で、社会保障制度改革が重要なテーマです。制度設計も大切ですが、「死に方」に対する意識改革も必要だと思います。尊厳死についても理解を深めていかなければならないでしょう。

教養での哲学もいいのですが、問題意識をもって医学部教育の場であらためて、哲学教育、をやりたいと思います。死生観を身につけるこ

とは何より大切と思います。

また、地域により医療格差の解消も重要です。医師偏在とは札幌、旭川、函館で医師は北海道全体の76%が在住しているわけですね、他の176市町村をどうまかなうかが問題です。長瀬先生と地方の中学校を回って、医者を目指すように啓蒙する活動もしており、前回は中標津町にいきました。地域医療再生法などありますが、ある程度強制力をもった医師派遣機能がなければいけないと思います。この点については同窓会の皆さんからの意見もとても重要ですので、是非お寄せください。

もう一つ最も大切にしているテーマは安全保障です。自衛隊の中に衛生部門という部署がありますが、医官が不足しています。自衛隊病院の稼働率は3割で、スキルもモチベーションも低下しているのが実情です。有事の法整備。9条の2項をかえることが議論になっていますが、合わせて有事にそなえる救急や外傷外科学の確立、衛生兵の医療行為など細部での調整も必要です。

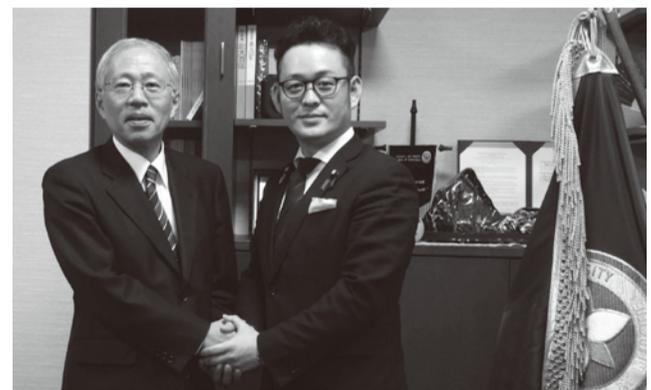
現在我が国の周辺では外国との間で様々なことがおこっているが見ないふ

りをしてはいけないと思います。中国も頻りに領海に侵入してきますが、極東ロシアに対するスクランブル発進は年間約500回で増えています。私たちは子供、孫の世代に責任をもつためには我々の団塊ジュニアの世代が頑張っていないといけないと思います。

田中：最後に座右の銘と後輩へのアドバイスをください。

勝沼：座右の銘は「外柔内剛」です。外見ではなく中身で勝負したいと思います。後輩へのアドバイスですが、学業の上では私は決して皆さんが誇れるような先輩ではないと思いますが、これまで後先考えずに何でも飛び込んで挑戦してきました。北海道大学の歴史と伝統はフロンティア精神で、いままですそれを勇気と覚悟をもって実践してきたつもりです。そうですね、後輩の諸君には「勇気と覚悟」をもって人生を歩んでいってほしいと思います。

田中：ありがとうございました。今後とも日本国のため是非国政の場で頑張ってください。



笠原医学研究科長表敬訪問風景。インタビュー終了後、笠原正典医学部長、寶金清博病院長、安田和則副学長を表敬訪問した。



学生さんとの対話も行われた。
後列左から、筆者(66期)、佐藤行真君(6年生:90期)、杉野弘和君(5年生:91期)、吉野光一郎君(4年生:92期)。前列左から、李里花さん(3年生:93期)、勝沼栄明議員(76期)、寺井小百合さん(5年生:91期)。

北海道大学ほっかいどう同窓会の設立のご案内

この度、北海道大学ほっかいどう同窓会が設立されることとなり11月15日に初めて発起人会がクラーク会館において開催されました。入会の案内は各学部の同窓会を通じて行うこととなりました。

発起人の中心の4名の代表幹事には、齋藤和雄先生（35期）が就任されており、総勢約100名の発起人には医学部出身では、長瀬清先生（40期）、吉岡充弘先生（60期）、田中伸哉先生（66期、兼医学部代表）がメンバーとなっています。

この会では医学部同窓会からは得にくかった、全学レベルでの同窓生の情報がいち早く得る事ができ、より一層の交流を深めることができると思っていますので、是非医学部同窓会会員の皆様のふるってのご入会をおすすめします。

入会のご案内

北海道大学の地元北海道には多くの卒業生、教官・職員などのOB、現役の方々が存在・在勤しているにもかかわらず、北海道全域を網羅し、学部横断的な同窓会がありませんでした。このことを踏まえ、多くの発起人の方々のご賛同を得て、有志会員の皆様とメールなどのインターネットを中心に情報交換するネットワーク型の同窓会を来年4月に設立することにいたしました。

この同窓会に多くの有志の皆様が参加して交流の輪が広がることにより、

活動の効果が高まり、ひいては母校北海道大学ならびに北海道の発展に貢献することが期待されます。どうぞお誘い合わせのうえ、入会されますようご案内いたします。

同窓会の概要

1. 北海道に在住、在勤する北大卒業生など個人の関係者が学部の違いを越えて集う同窓会です。
2. 北海道地域外の同窓生も個人会員になることができます。
3. 原則として事務局を通してメールなどインターネットで個人会員と情報交換するネットワーク型の会です。
4. 設立は平成26年4月の予定です。

同窓会の活動

1. 定例総会（年次総会/4月）
2. 交流会、講演会の開催、ホームカミングデーなど関連行事への参加
3. 将来勉強会（同窓会のあり方を若手中心に議論）
4. メールマガジン発行（月1回のニュースほか適宜）と情報交換
5. ホームページの管理・運営
6. 会員名簿の管理と発行（発行方法については今後検討）
7. 母校の事業と連合同窓会の活動への協力

会 員

1. 北海道大学各学科の卒業生、大学院修了者、各学部付属学校の卒業者

2. 前号以外の教員、職員、研究に従事した方で、入会を希望する方
3. 前1、2号に該当し、北海道以外に居住する方で、入会を希望する方

会 費

1. 年会費3,000円
2. 年会費は5年分を一括して納めることができ、その場合は12,000円
3. 終身会費36,000円（満60歳以上の方）

設立趣旨

北海道大学の歴史は137年前の明治9年の札幌農学校にさかのぼり、以来、先達たちが培ってきた「フロンティア精神」、「国際性の涵養」、「全人教育」、「実学の重視」という4つの教育・研究基本理念を掲げ、我が国の基幹総合大学として揺るぎない存在を保持してきた。

こうしたなかで、北海道大学は平成16年4月に国立大学法人となり、その伝統を踏まえながら新世紀における知の創成、伝承、実証の拠点として変革を進めている。

一方、大学法人化と軌を一にして「北海道大学が世界水準の知のリーダーとして発展していくためには、従来にもまして社会に向けての情報を発信し、教育研究活動への参加や支援を求める社会ニーズを適切に把握することが重要である。このためには、大学構成員の努力はもちろんのことであるが、同窓生からの物心両面に渡る協力

と支援が不可欠であるので、大学と密接に連携した学部等同窓会や地区同窓会で組織する全学同窓会を設立することが必須である。」との理念を掲げ連合同窓会が設立された。

現在、連合同窓会は傘下の20の学部等同窓会と28の地区同窓会とで構成されている。

今回、北海道大学の地元北海道を中心に地区同窓会として「ほっかいどう同窓会」を新たに連合同窓会傘下に設立し、北海道大学と地元北海道の発展を期して、より一体感のある相互支援体制を構築するものである。

組織の運営は、学部の違いを越えて多くの有志個人が参画し、メールなどインターネットでスピード感をもって情報交換できる会を目指す。



入会のお申し込み方法

下記のウェブサイトから直接お願いします。

<http://www.hokudai-hc.com/>
「北海道大学ほっかいどう同窓会」で検索できます。



北海道大学ほっかいどう同窓会設立準備室

〒060-0808 札幌市北区北8条西7丁目 北海道大学クラーク会館3F 電話/FAX 011-747-7588 メール hokudai-hc@general.hokudai.ac.jp

原稿の募集

本新聞は、6月末(5月号)、10月末(9月号)、1月中下旬(1月号)頃に発行しております。編集委員会は、遅くとも発行日の2ヵ月前に開催しております。これに間に合うようにご投稿いただければ、時機を得た掲載が出来ます。先着順ですので、紙面にスペースが不足している場合は、次号以降に掲載させていただきますので、ご了承ください。

なお、掲載の可否につきましては、当委員会にご一任ください。（※原稿締切日は、5月号は4月20日頃、9月号は8月20日頃、1月号は11月5日頃を予定しております）

(1) 一面の写真

題名と説明文(170字以内)をあわせてお送りください。メールに添付していただいても結構です。

(2) 褒章・叙勲

道内受章者につきましては「北海道新聞」や「北海道医療新聞」で情報を入力しておりますが、道外の会員の受章につきましては情報入手漏れの恐れがあります。各期評議員の方には文書でご依頼しておりますが、「掲載漏れ」を避けるため、ご本人あるいは各期評議員の方から書面等でお知らせくださいますよう、改めてお願いいたし

ます。

(3) 「各地区フラテ会」

各地区フラテ会からのご寄稿お待ちしております。お送りくださる場合、字数は本文1900字以内でお願いいたします。集合写真などもお受けしております(メールに添付していただいても結構です)。

(4) 「エルムの仲間達へ」

会員の声を幅広く取り入れるため、平成25年1月号(144号)より「エルムの仲間達へ」を設けました。皆様のご応募お待ちしております。字数は本文1900字以内、サブタイトルはご自由におつけください。また、顔写真を1枚お送りください(メールに添付していただいても結構です)。

(5) 「会員のひろば」

内容は自由にご投稿いただけます。字数が多い場合は、紙面の都合上、何号かに分割して掲載させていただく場合がございますので、ご了承ください。

(6) 新刊書紹介

著者・编者から自己申告をいただいたものに限って掲載しております。紹介文は、平成25年度より、ご本人以外の会員の方に書いていただいております。字数は600字以内です。新聞に掲載をご希望の方は、先着順ですので、編集委員会まで間に合うよう、まずは事務局までご連絡ください。なお、新刊書は画像が入手出来ない場合のみ、事務局までお送りください。新聞発行後にお返しいたします。

同窓会への寄付受け入れ報告

平成25年11月18日 17期の高桑榮松先生、荒川巖先生のお二人から、医学部同窓会事業支援のため金545,356円をご寄付いただきました。

なお、同窓会への寄付は今回で合せ

て4件、総額約72万円でございます。

以上、御礼申し上げますとともにご報告申し上げます。誠に有り難うございました。

同窓会への寄付のお願い

医学部同窓会では皆様からの寄付金を受け入れています。

いただいた寄付金は特別会計で積み立てており、一定の金額に達しましたら同窓会理事会及び評議員会で慎重に検討し、例えば学生への奨学支援、教員への研究助成、あるいは平成31年に迎える医学部創設100年記念事業支援など、同窓会事業、医学部事業に有意義に活用させていただく所存であり

ますので、皆様のご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

ご寄付をいただいた場合は、寄付者のご了解の下、同窓会新聞でご紹介させていただきます。同窓会への寄付につきましては、同窓会事務局にご連絡ください。

総会、新入会員歓迎会のお知らせ

同窓会総会

平成25年度北海道大学医学部同窓会定例総会を下記のとおり開催しますので、ご出席いただくようご案内いたします。

日 時：平成26年2月10日（月）
午後6時より

会 場：札幌パークホテル
パールルーム（2階）

所在地：札幌市中央区南10条西3丁目

電 話：011-511-3131

議 事

1. 報告事項（予定）

- (1) 庶務報告
- (2) 事業報告
- (3) 編集報告
- (4) 平成25年度会計中間報告
- (5) その他

2. 協議事項（予定）

- (1) 会則の一部改正

(2) 平成24年度会計決算報告

(3) 平成24年度会計監査報告

(4) その他

総会において、平成25年度フラテ研究奨励賞の授賞式を予定しています。

新入会員歓迎会

総会終了後の午後7時から、同ホテル エメラルド（3階）において、新入会員（第90期）の歓迎会を開催しますので、先輩会員の皆様には、是非ご参加くださいますようお願いいたします。

なお、参加費は無料ですが、準備の都合がありますので、ご参加いただける方は1月31日（金）までに同窓会事務局に電話又はメールによりご連絡願います（事務局の電話番号、メールアドレスは1面上部に記載）。

理事会・評議員会報告

理事会

日 時：平成25年11月25日（月）
午後6時00分から午後7時11分
場 所：医学研究科 中会議室
出席者：理事10名、監事、評議員会議長、
評議員会副議長

評議員会

日 時：平成25年11月25日（月）
午後7時14分から午後8時25分
場 所：医学部学友会館フラテ
大研修室
出席者：評議員、予備評議員60名
（出席：12名、委任状提出48名）
理事、監事9名

〔報告事項〕

1. 編集報告について

- 編集担当理事から、次のとおり報告があった。
- 同窓会新聞は6月に145号、10月に146号を発行し、現在は来年1月の147号発行に向けて準備を進めていること。
- 本年は同窓会誌を発行する年であり、12月20日頃には発送できるよう作業を進めていること、及び表紙は北大キャンパスを上空から見たようなイメージのデザインとしたこと。
- 昨年はホームページの内容を大幅にリニューアルしたが、本年も「同期会・各地区フラテ会のお知らせ」のウィンドウを単独で設けて見やすくしたこと、及び「メディア情報」のパナーを新設し新聞報道記事などを紹介したこと、並びに今後も随時内容を見直し改良して行きたいと考えていること。

2. 平成25年度会計中間報告について

会計担当理事から、次のとおり報

告があった。

- ・中間報告に先立ち同窓会への寄付報告として、本年11月18日に17期の高桑榮松先生、荒川巖先生のお二人から同窓会に545,356円の寄付をいただいたこと、及び受け入れた寄付金は専用の銀行口座で特別会計として管理していること。
 - ・続いて会計中間報告として、収入については、本年10月末の収入済額は会費収入が約1,230万円（対予算実行率「以下同じ」66%）、事業関連収入が19万円（90%）、雑収入が約55万円（110%）であり、合計収入済額は約1,305万円であること。
 - ・この金額に今後の収入見込額、前年度繰越金を加えた約2,647万円が今年度の合計収入見込額であること。
 - ・支出については、事業費が約238万円（22%）、総務費が約440万円（53%）であり、合計支出済額は約678万円であること。
 - ・この金額に今後の支出予定額を加えた約1,946万円が今年度の合計支出見込額であること。
 - ・以上、今年度の収入見込額から支出見込額を差し引いた約701万円が、現時点における次年度繰越見込額であること。
3. 会員の個人情報の提供について
北海道大学では教育の質の改善を目的として各学部と連携して卒業生アンケートを実施することになり、医学部からの依頼を受けて該当する卒業生の連絡先データを提供したこと。
4. その他
北海道大学ほっかいどう同窓会が平成26年4月に設立される予定である

こと、及び本会はメールなどのインターネットを中心に情報交換するネットワーク型の同窓会であること。

〔協議事項〕

1. 平成25年度定例総会及び新入会員歓迎会の開催について

本年度の定例総会及び新入会員歓迎会を平成26年2月10日（月）に札幌パークホテルで開催することが了承された。

2. 平成26年度会費免除について

昭和33年卒業の第34期会員については平成26年度に入会後55年を経過するため、会則第6条第2項に基づき、以後の会費を免除することが了承された。

3. 評議員等の交代について

前回の評議員会（平成25年4月26日開催）以降に交代届けのあった評議員及び予備評議員について了承された。
34期の三浦敬一郎先生が多米豊先生に交代、42期の安田慶秀先生が小林邦彦先生に交代、65期の渡利英道先生が小谷晃司先生に交代。

4. 次期役員の選考について

本日の評議員会に出席している評議員及び予備評議員の中から選考委員会委員を選出するための委員5名を指名し、その5名により選出された選考委員会は来年3月開催の評議員会で次期役員候補者を報告することが了承された。

次いで議長から選考委員会委員を選出するための委員として、鈴木康夫（59期）、吉田純一（54期）、小林清一（50期）、三上一成（43期）、鈴

木重統（39期）の各氏が指名された。

5. 会員の見直しについて

平成26年4月に医学部医学科1年に入学する学生から、入学と同時に同窓会員とすることが了承された。

6. 刊行物送付対象者の見直しについて

平成26年度からは、2年を超える会費未納者には同窓会誌及び会員名簿の送付を停止し、同窓会新聞だけを送付することが了承された。

なお、会費未納者から会誌又は会員名簿の有償頒布の申し込みがあっても、会費完納が条件であり、受け付けないこととする旨、評議員会決定事項として確認された。

7. 会費納付方法の見直しについて

平成26年度分の会費から現在の郵便局払い込みを廃止して、コンビニ納付、銀行口座振り込み、及び希望する会員は銀行口座自動引き落としの方法に変更することが了承された。

8. その他

(1) 同期の基金について

出席の評議員から、同期の基金を作って同窓会費を完納している卒業期があるので、これから卒業する期や入学してくる期の学生に周知・指導することについて発言があった。

(2) 同窓会誌への投稿について

出席の評議員から、同窓会誌の各期だよりには字数制限がある一方で、個人が投稿する文芸記事についても字数制限を徹底させることについて発言があった。

同窓会費納入のお願い

会員の皆様には平素より本会の運営に格別のご支援を賜り厚くお礼申し上げます。

ご承知のとおり本会は北海道大学医学部医学科、北海道大学附属医学専門部及び権太医学専門学校卒業者、並びに卒業生以外の北海道大学医学部医

学科の教員及び研究者で入会を希望する方々により組織し、本会の事業は会員の皆様の会費で運営されています。

本会が行っている主な事業としては、年3回の同窓会新聞の発行、隔年の同窓会会員名簿と同窓会誌の発行、新入生合宿研修、医学展、進級時懇談

会、卒業祝賀会など学友会への経費支援、同窓生、学生父母などに参加していただくフラテ祭への経費支援、若手研究者の研究助成等を実施しています。

しかし近年は会費の納入率が思わしくなく平成24年度は61.3%に留まりこれ

らの事業実施に影響が生ずるため特別会計から920万円を繰り入れざるを得ませんでした。

会員の皆様にはこのような本会の財務状況をご理解いただき、まだ会費を納めておられない方は納入いただきますようお願い申し上げます。

同窓会費未納者 に対する 重要なお知らせ

医学部同窓会では現在、同窓会費の完納・未納の区別なく全ての会員に同窓会新聞、会員名簿、同窓会誌を発行の都度お送りしていますが、平成25年11月25日に開催された評議員会で会費

未納者に対する刊行物の送付について協議した結果、平成26年度からは、2年を超える会費未納者には同窓会新聞は送付しますが、会員名簿、同窓会誌は送付停止といたします。

なお、会費未納者から会員名簿あるいは同窓会誌の有償頒布の申し出があっても、会費完納が条件ですでお受けできません。

平成26年度から同窓会費の納付方法が変わります

医学部同窓会では現在、郵便局の払い込みにより同窓会費を納めていただいておりますが、不便であるというご指摘を受けていました。

そこで少しでも不便さを解消しようと平成25年11月25日に開催された評議員会で会費の納付法について協議した結果、平成26年度の会費から次のいずれかの方法により納付していただくことになりました。

1. 現行の郵便局払い込みは廃止
2. 平成26年度からの納付方法
 - (1) コンビニで納付 (振り込み手数料は不要です。)
 - (2) 同窓会の銀行口座へ振り込み (振り込み手数料は会員負担となります。)
 - (3) 希望する会員は、銀行口座自動引き落とし (引き落とし手数料不要です。)

3. 今後の予定
 - (1) コンビニ納付
次号の同窓会新聞をお送りする際にコンビニ払込票を同封いたしますので、コンビニで納めてください。
 - (2) 銀行口座振り込み
コンビニで納付しないで、同窓会の銀行口座へ振り込むことも可能です。この場合は最寄りの銀行から振り込んでください。

- (3) 銀行口座自動引き落とし
口座自動引き落としを希望する会員は、本日以降同窓会事務局にご連絡ください。折り返し口座指定用紙をお送りいたします。

告知板

<学内・院内人事異動>

<採用>

- 平成25年11月1日
宮本大輔(75期) 病院先進急性期医療センター助教
清水祐輔(81期) 病院精神科神経科助教
- 平成25年12月1日
森 敏洋(81期) 病院麻酔科助教

<辞職>

- 平成25年11月30日
藤森研司(60期) 病院地域医療指導医支援センター准教授 (東北大学大学院医学系研究科教授)
- 平成25年12月31日
朝比奈 肇(75期) 病院内科 I 助教 (ダナ・ファーバー癌研究所リサーチフェロー)

<東京フラテ会のご案内>

恒例の東京フラテ会を、北大医学部学生有志を交え、下記のとおり開催します。学生を歓迎し、互いに懇親を深めたいと存じますので、皆様万障お繰り合わせの上ご参加下さいますよう、ご案内申し上げます。なお、今年の講演会の講師は、北大医学部長の笠原正典先生(56期)です。東京フラテ会 会長 松谷有希雄(51期)

記

日時：平成26年3月15日(土)
17時30分～講演会、
18時30分～総会、懇親会
場所：学士会館 202号室、203号室
東京都千代田区神田錦町3-28
(地下鉄神保町駅A9出口 徒歩1分)
会費：1万5千円

フラテ100号発行のお知らせ

医学部フラテ編集部

同窓会新聞をご覧の皆様、いつも学友会誌フラテをご購読いただき、誠にありがとうございます。皆様の暖かいご支援により、2013年発行の99号も大変ご好評をいただきました。

さて我々フラテ編集部では今年度もフラテ発行に向けて準備を進めております。お陰様でフラテは100号を迎えることができました。従来の内容に加えて、100号記念特集としてフラテの歴史、顧問インタビュー、地

域医療特集なども企画しております。どうぞご期待ください。

100号の発行は、2014年2月下旬を予定しております。購読をご希望の方は、同封の振込用紙にてお支払いをお願い致します。注文および支払方法を、郵便振込みによる前払いとさせていただきますことにご理解をお願い致します。

なお、フラテの申し込みは9月と1月の2回受け付けております。二重申し込

みなさらないよう、ご注意ください。9月にお申込みされた方は、1月にお申込みされる必要はございません。

また、当編集部には99号以前の残部もございます。ご希望の方は、100号をお申し込みの際に、振込用紙にその旨をお書き添え下さい。別途、送らせていただきます。99号を申し込まれた方で、まだお手元に届いていない方もどうぞフラテ編集部までご一報ください。

<100号の主な内容>

- ・フラテ100号記念特集
- ・特集記事

- ・フラテ各地に行く<沖縄編>
- ・教室便り
- ・学年紹介
- ・部活紹介
- ・新任教授のご紹介
- ・各講座新旧名称一覧
- ・茶苑
- ・学生の広場 など

<お問い合わせ先>

フラテ編集部
〒060-8638 札幌市北区北15条西7丁目北海道大学医学部内
TEL/FAX 011-736-1444(留守電あります)
E-mail:frate.med@gmail.com

新刊書紹介



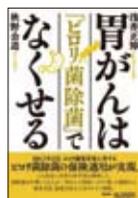
「遙かな医の道」
小野 淳信(15期)
津軽書房
¥1,890

超高齢化が進む社会において100歳の高齢者と逢うことはそれほど珍しいことではなくなったが、医師としての信念を吐露され、遠い日そして遙かな青春の日々への回想を綴られた書を著される方はきわめて稀であろう。最後の章「私のライフワークとなった学校保健」で「私は、我が国の教育政策のなかに学校保健のあることを誇りに思う」と断言する。また「日本が世界の長寿国として戦後永年国際的地位を占めている最大の理由は、多くの人が言うように、日本の医学や医療が進歩し、普及もしているからだけではない。その本当の原因は①清潔を尊ぶ日本人の国民性②幼少時からの定期検診の普及③学校医や養護教諭などの保健指導などに在ると言ってもよい」というのが先生の結論である。

先生は、昭和15年北大を卒業すると軍医として北支などに二度出征、分裂病の患者に軍刀をもってふりまわされたり、女スパイを説得したり・・・さまざまな難局をもちまへのヒューマニズムにあふれる説得力で切り抜けてきた。

終戦後は弘前をはじめとして保健所長、学校医として活躍され学校保健の重要性を強調され97歳まで現役で活躍された。101歳になられた先生はパリやモンゴルから弘前大学に留学している学生を自宅に招き学校保健の重要性を説かれてライフワークの集大成にしようとして日々心がけておられる。本書は小野先生畢生の書であり、時空をこえた信念が溢れている。

(39期 鈴木重統)



「胃がんは「ピロリ菌除菌」でなくせる」
浅香 正博(48期)他 著
潮出版
¥1,260

公衆衛生に関わる者の多くが、人と地域集団の健康を維持し増進するためには、治療も重要だが予防こそが欠かせないと考えています。しかし実際には、様々な疾病に対し、有効な予防活動を企画立案、そして実施することは簡単ではありません。2013年2月21日、ピロリ感染胃炎に対するピロリ菌除菌の保険適用が認められました。折しもその約10日前、札幌がんセミナーで浅香先生のご講演の座長を務める機会をいただき、保険適用拡大予定を含め先生の胃がん対策への情熱、ピロリ菌除菌にける思いを伺っておりましたので、この新刊書をとても身近に感じながら、拝読いたしました。ピロリ菌の特性から検査法に始まり、胃がんの治療法まで、時代を追って、各国間の違いも踏まえ書かれており、前半はピロリ菌と胃がんに関する解説本と言えるかもしれません。しかし第四章以降は医学・医療現場から一歩踏み出し、保険適用に至るまでの公明党秋野議員、松議員のご活躍、政府や厚生労働省への働きかけなどが収められています。これまでの医師・研究者による研究成果の積み重ね(エビデンス)をどのように国に認めてもらい、どのように政策に反映させるかの取り組みが書かれ、頁をめくる手が止まりませんでした。浅香先生は2013年を「胃がん撲滅元年」と位置付けられました。ピロリ菌除菌を通じて、胃がんが予防され、10年、20年後には胃がんによる死亡者がゼロに近づくことを信じています。

(会員2 玉腰暁子)



「カラー版 消化器病学」
浅香 正博(48期)他 編
西村書店
¥20,475

先日浅香正博先生(48期)から重い箱が届いた。開けてみるとグリーンを表紙の美しい教科書だった。持った手応えがよく、重厚な教科書なはずなのに、やわらかい配色の文字と写真に思わず引きこまれ、まるで物語を読むかのようにわくわくしながらページを読み進めた。

間もなく、消化器内科(第3内科)の坂本教授からメールをいただき、これまで我国にない充実した内容の「消化器病学」という本が発行され、多くの北大の教員が執筆しているの、学生講義もこの教科書に沿っていききたいとお話だった。

全体で約1500ページの大作で、470ページに総論が、診察、構造、症候学、検査、画像と大変美しく詳細な図とともに理路整然と配置されている。後半の約1100ページにおよび消化器各論が基本概念から最先端の病態生理、治療法まで網羅され記されている。画像、内視鏡写真、病理組織、そして最先端の遺伝子解析とパルス解析の図まで網羅されている。消化器内科医でなくとも、是非一読する価値がある教科書と思う。

浅香先生が胃がん予防の根幹となるピロリ菌の仕事で大きな成果を挙げられたことはここで言うまでもないが、1987年に先生がピロリ菌に出会った当時、第2病理の先輩の故井上和秋先生(35期)にいち早く理解いただき、病理部で協力してもらったお陰と謙遜され、このエピソードが7ページのコラムに書かれている。病理学の後進として誇らしい。

この本は今後英訳され世界中で読まれることも視野に入っているということだが、まさにそのことを強く期待させる名著である。

(66期 田中伸哉)



「臨床研究の道標 -7つのステップで学ぶ研究デザイン-」
福原 俊一(55期)
認定NPO法人
健康医療評価研究機構
¥4,725

医学部を卒業後の新米医師が、医療実務以外に必ず行うことは何でしょう?その一つは、間違いなく「学会発表」でしょう。学会発表は、臨床家として生きて行くための「通過儀礼」といえます。しかし、この通過儀礼も、医師としての自覚と責任が芽生えたと共に、変貌して行くはずで。日々の診療で疑問に思うことを「明らかにしたい」と思う気持ちです。この気持ちが私たちが臨床研究に駆り立て、その結果が学会発表に結びついて行くものだと思います。皆さんは、学会発表のための方法を先輩、上司、書籍など様々なものから学んだはずで。しかし、臨床研究の方法を正式に学んだことはありますか?臨床研究の仕方を懇切丁寧に教えてもらったことはありますか?

本書は、この疑問に明確な解答を与えます。臨床研究の「基本設計図」を作り上げる過程が、若手女性外科医Oliveとその師範の問答形式を取りながら、7つのステップで分かり易く解説されています。章末には、クイズが出題され、解説は読者ウェブサイトに掲載されるなどユニークな内容が盛り沢山です。著者の福原俊一教授(北大55期、京都大学医学研究科 副研究科長、福島県立医科大学 副学長)の講演・講義を是非一度、聴いて下さい。直ぐにファンになること疑いなしです。福原教授が常に強調されるフレイズを最後にお示しし、若手からベテランまで、一人でも多くの臨床家が本書を手にし、楽しく有意義な臨床研究に進まれることを期待します。(なお本書は、12月5日現在、Amazon.comにおいて医学書一般で第1位にランクされています)

「臨床研究の究極の目的は、医療を変えることである」

(57期 白土 修)

ご逝去者

新聞146号発行以降、ご連絡いただいた方を掲載しております。

御逝去年月日	氏名	期	御逝去年月日	氏名	期
平成24年 2月20日	矢板 勉	専旧7	10月22日	川口 汪	24
平成25年 4月15日	小田 欣一	29	10月26日	鎌田 剛	専旧7
7月16日	関 一夫	専門5	10月30日	木住野 皓	44
7月21日	長瀬 勇	専旧6	11月 1日	吉村 洋吉	34
7月23日	山辺 富也	専旧6	11月 1日	土門 洋哉	39
7月25日	池田 忠雄	29	11月 5日	崖 節也	19
8月 1日	稲辺 實	専新7	11月 6日	清水 光博	28
8月 6日	伊藤 周	33	11月10日	松宮 英視	24
8月 7日	北澤 照男	専新7	11月22日	川嶋 旭	32
8月 8日	須藤 清二	27	11月23日	真鍋 四郎	25
8月15日	今村 光男	29	11月30日	開田 吉廣	専5
9月26日	小崎 雅司	専旧6	12月 5日	飯田 博	28
10月17日	藤 卷 健一	専新7	12月 8日	東海林 誠	専5
			12月 9日	高橋 正	29

同窓会新聞は142号からHP上でご覧いただけます。
アドレスは次の通りです。
<http://www.med.hokudai.ac.jp/~alum-w/news/index.htm>
ご意見等ございましたら、事務局までご連絡くださいますよう、お願いいたします。

一面の写真説明

「初冬の北大キャンパスを望む」

木佐 健悟(80期)

JR札幌駅西側の線路沿いに建つホテルの上層階から撮影しました。

編集後記

秋の褒章・叙勲を受けられた齋藤先生、櫻田先生、小西先生おめでとうございませ。見事衆議院議員に当選された勝沼先生には、今後の国政でのご活躍をお祈り申し上げます。巷でも2020年に東京オリンピックが開催されることが決定し、明るい話題の多い誌面となりました。2019年には北大医学部創立100周年を迎えます。100周年行事は私たち同窓生にとって重要なものです

うっすらと雪の積もった初冬の北大の風景です。

写真右側中央に見える北大病院が目立ちます。

また、写真奥(北側)に新しい建物がどんどん増え、時代の変化を感じさせます。

ので、皆さんの力で素晴らしいものにしていただけたらと思います。本誌が同窓会の皆様をつないで100周年行事を盛り上げるのに一役買えるよう編集委員一同努力して参りたいと思います。

本誌6、7頁の約50%は同窓会費納入に関する内容になっております。どうか本誌をお読みいただいた会員の皆様はまわりの同窓会員に本誌が届いているかどうかお声掛けをお願いいたします。

(67期 樋田泰浩)

印刷所 株式会社DNP北海道

〒065-0007 札幌市東区北7条東11丁目1番1号
代表(011)750-2205